かゑらじと　かねて思へハ　梓弓
なき数に入る　名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信　第65号
平成30年3月13日
発行＝四條畷楠正行の会
〒575-0021　四條畷市南野5丁目2番16号
四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

伊賀説を主張する梅原、昭和の創作と言い切る表

果たして観阿弥は楠正成の甥か

＝　上嶋家文書の評価をめぐり真っ向から対立する意見　＝

２月例会テーマは、観阿弥と正行

産経新聞の楠木正成考特集＜第14部＞で、「観阿弥・世阿弥に連なり」の見出しが躍った。（右写真）

２月例会のテーマは「観阿弥と正行」そのものズバリ。

果たして伊賀の上嶋家文書から発見された系図に載る観阿弥は楠正成の甥説は本当なのか。しかし、調べていくと、そう簡単な話ではないことが分かった。実は、この上島家文書の評価をめぐり真っ向から意見が対立しているのである。

「観阿弥と正成」で伊賀説を主張した梅原猛

梅原猛は、自著「観阿弥と正成」の中で、上嶋家所蔵文書の「観世系図」「観世福田系図」の発見は、今までの能楽論に根本的な改変を迫るもので、観阿弥の母は楠正成と姉弟で、観阿弥は正成の甥にあたるとして、以下、旧来の能楽論を断罪する。

— 能楽研究者の「上嶋家文書」に対する拒否と沈黙は、このような「上嶋家文書」に記載された衝撃の事実をどう受け止めてよいのか唖然としている状態から生じたことであるとみてよかろう。

私は、この二つの事実を認めたら、観阿弥・世阿弥解釈ひいては能楽解釈のコペルニクス的転回を行わざるを得ないと思う。

私は全面的に表氏に論争を仕掛けたいと思う。表氏の伊賀説の否定は、観阿弥・世阿弥を正しく捉える道を閉ざしてしまうものである。

明治42年、吉田東伍氏「世阿弥十六部集」以来この伊賀説は疑われ、能勢朝次氏の「能楽源流考」において、観阿弥の本拠を伊賀ではなく大和

戦後72年 楠木正成考

〈第14部〉「楠公さん」を生んだ兵庫（神戸）③ 「公」を忘れた日本人へ

観阿弥・世阿弥に連なり

「汝はすでに十歳に余れり。一言耳の底に留まらば、わが教誡に違ふ事なかれ」

楠木正成は、この言葉から嫡子・正行に後事を託した、と『太平記』は記す。

桜井の決別として有名な父子の別れである。正成はこの後、湊川の戦いで壮絶な最期を遂げ、正行は郷里の河内で母の訓戒も受け、見事な青年武将に育って南朝に尽くした。

湊川神社（神戸市中央区）の宝物殿に所蔵される絵画「大楠公像」は、慈父を思わせる穏やかな表情で、桜井の決別を連想させる。作者は横山大観。昭和10年の楠公六百年祭にちなんで奉納された。

「人物画が少ない大観に当時の宮司が、まさに三顧の礼でお願いしたと聞きます。当時の美術界の重鎮が描いてくれたことで、その後、楠公さんを描く画家が非常に増えました」

同殿の岡村光浩・主任専門員はそう話す。それまでの正成像は、江戸時代の錦絵の影響を受けた甲冑姿、戦う姿が多かったが、大観以降は諭し、導く威厳ある姿が主流になったという。

所蔵約400点。絵画だけでも約200点という宝物殿は、れっきとした博物館、資料館並みの規模だが、重要文化財は2点しかない。段威腹巻と正成の真筆と伝わる法華経奥書だ。

「父子2代だけでなく、子孫の大半も南朝のために戦い、滅びたので、ゆかりの品が驚くほど残っていない。楠公さんらしい現実だと思います」

段威腹巻は正成着用といわれ、龍野藩主・脇坂家に伝わり、明治24年に奉納された。

「脇坂家では家宝として保存してきたが、湊川神社ができたので、そちらで保存、展示してほしいということだったようです」

法華経奥書は、正成が寺か神社に奉納したものとみられ、現存する真筆では唯一、楷書で書かれている。

「建武の中興が成立して宿願がかなったお礼として書かれたものです。楷書には深い感謝の念がこもっています」

〈神能殿〉

そう呼ばれる施設が湊川神社にはある。400人余りを収容できる能楽堂で、由来を示した掲示板には別掲のような系図（敬称略）が載っている。

正成には妹がおり、伊賀の服部家に嫁いで能の始祖・観阿弥を産んだことを示すものだ。観阿弥は服部家に連なる永富家から嫁をもらい、世阿弥、そして観世家へとつながる家系となった。永富家は現在のゼネコン「鹿島」の創業家へとつながる。

「このご縁で神能殿は鹿島がつくりました。多額の寄付も頂戴したと聞いています」

同神社の元禰宜、平塩滋敏氏はそう話す。能舞台は、観世宗家の舞台を移築したものだ。

「長く、兵庫県内唯一の能舞台として活用されました。楠公さんは文化面でも兵庫に貢献していたといえるかもしれません」

横山大観の「大楠公像」。慈父の正成像を確立した作品だ（湊川神社所蔵）

楠木家と観世家の関係略図

楠木正遠 ― 楠木正成
　　　　 ― 女（正成の妹）
上島景盛 ― 服部元成（＝女（正成の妹））― 観阿弥 ― 世阿弥……観世清和
　　　　 ― 永富恵仁 ― 永富宗済 ― 女（＝観阿弥）
　　　　　　　　　　　　　　　 ……鹿島守之助……鹿島昭一

楠木家と観世家

観世家の系譜についての史料は、世阿弥の談話を筆記した『申楽談儀』と世阿弥のおい、観世小次郎の画賛があるが、『申楽談儀』は芸能上の系譜を記したものと判明した。観阿弥は文中3（1374）年、3代将軍・足利義満の面前で能を演じて盛名を得たが、楠木氏の血縁を秘匿するために世阿弥は、芸能上の系譜のみを語ったと考えられる。

神能殿で紹介されている系譜は、観阿弥の父方の実家、伊賀の上島家の古文書から発見された『観世福田系図』と、兵庫県揖保川町（現たつの市）の豪農、永富家の古文書で裏付けられた。

「楠木正成考」冊子 後編も発行
1500円（税込み、送料別）
産経新聞開発 ☎06・6633・6062

とする説が定着した。そして昭和49年、香西精氏の「観阿弥生国論再検」と表氏のその説の全面的支持によって、伊賀説は完全に息の根を止められてしまったのである。

私はここで、じっくり香西氏、そしてこの香西氏の論を支持する表氏に反論したいと思う。

表章「昭和の創作・伊賀観世系譜」で伊賀説否定

梅原猛の挑戦を受けた格好の表章は、自著「昭和の創作・伊賀観世系譜」を出し、その中で、“梅原説は空論にすぎない”そして“伊賀観世系譜は後代作成の偽文書である”と言い切る。

伊賀観世系譜は、明治41年発刊の「申楽談儀」第23条に現れる多くの固有名詞を共有しており、少なくとも明治42年以降の創作である。更には、昭和初期に学会に紹介された「四座役者目録」を利用している等、昭和になって以降の編纂である可能性が極めて高い、と。

― 観阿弥が故郷を奪われたというのは、香西精や私が観阿弥伊賀出身説や伊賀創座説を否定したことを意味しており、それを批判して観阿弥伊賀出身説を蘇生させることが本書（「観阿弥と正成」梅原著）の主眼であることを暗示している。

あからさまな挑発を受けながら何の返答もしないのでは、梅原の意見に表が屈したかのように感じる人が出ないとは限らない。能楽研究者全体への侮辱とも聞こえる発言が含まれているのを放置するのも、仲間内では屈指の古株となった身として無責任のように思われる。何らかの形で「観阿弥と正成」の梅原説が空論に過ぎないことを明らかにしておく方がいいだろうと、考えを改めた。

伊賀観世系譜が後代作成のいわば偽文書であることを明らかにすれば、そんな文書を信用し、最重視し、誇大評価して話を展開している「観阿弥と正成」の内容がいかに空疎であるか、梅原の「画期的芸能論」なるものの実質の詭弱さがおのずと暴露されると考えたからである。

伊賀観世系譜が創作されたのは、のちに本論で論述する事ながら、昭和10年代になってからの可能性が高い。

楠正成が観阿弥と叔父・甥の関係であるとする楠・観世縁戚説や、鹿島守之助氏の生家たる播磨永富家と観世家が縁戚だとの説、が、これまた近年の創作に過ぎないことにも詳しく論究するであろう。

上嶋家文書、文学界に大きな影響

上嶋家文書の観世系図発見は、文学界にも多大な影響を与え、楠正成と観阿弥に縁戚関係があることを前提に、昭和34年、吉川英治が「私本太平記」を書くと、昭和39年には、杉本苑子が「華の碑文」を発表するなど、その影響は大きく拡がることとなった。

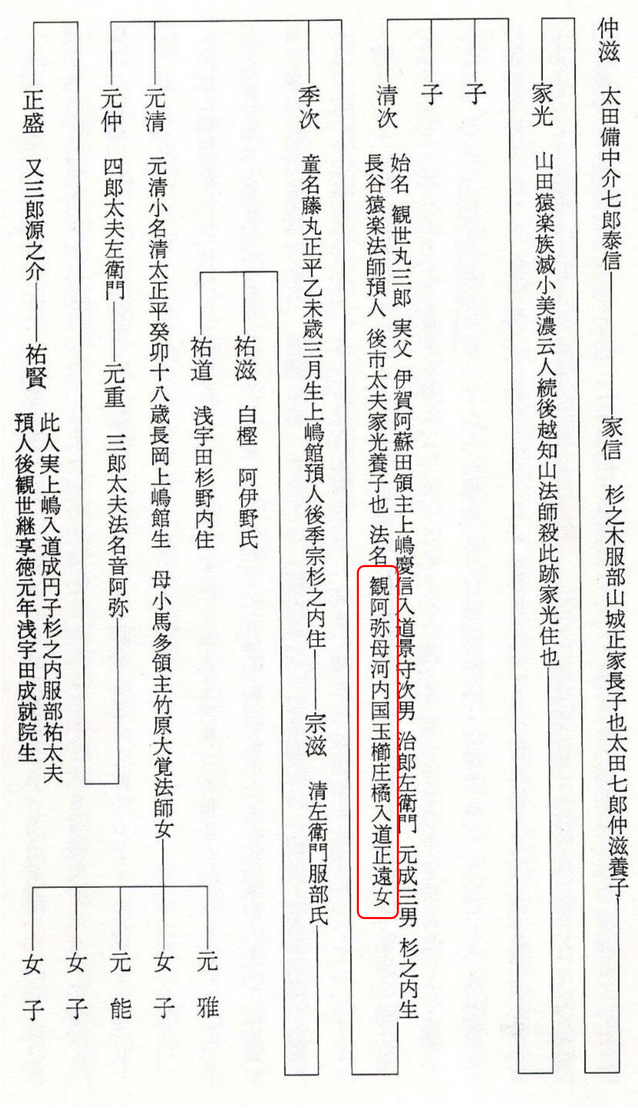
☆ 名張市役所ホームページより ☆

観阿弥は妻の出生地である名張市小波田で初めて猿楽座（後の観世座）を建てました。

観阿弥は田楽や猿楽という歌舞が唯一の娯楽であった時代に生きた猿楽師の一人で、元弘3年（1333）伊賀の国に生まれました。（但し、大和盆地南部を本拠とする山田猿楽の出身との説もあります）

幼名は観世丸、本名は清次といいます。伊賀の人という説ですが、伊賀のどこで生まれたかははっきりしません。

学界でも問題になっている、上野の上島家の文書によれば、観阿弥は伊賀国阿蘇田（現在は名阪国道、上のインターチエンジ付近）の豪族、服部元成という人の三男として生まれ、母は河内国玉櫛庄楠正成の兄姉という事です。父の元成は上嶋家に生まれ、服部家を継いだので、観阿弥の本名は、服部三郎清次になっています。

（文責「四條畷楠正行の会」代表　扇谷昭）

観世系図（「昭和の創作伊賀観世系譜」より転載）